



# クリスマス号 大学礼拝 Chapel News No.140

第140号 東北学院大学 2017年12月25日

## 巻頭言



野村 信  
宗教部長

### 「羊飼いたちの夜」

ルカによる福音書二章八〜一二節

その日、いつものように羊飼いたちは、星の輝く夜空の下でテントを張って、静かな夜を過ごしていました。テントの中で、婦人や子供たちは毛布にくるまって身を寄せ、外では男たちが交代で羊の群れの番をしていました。

牧草地を転々としながら暮らすごく普通の、しかし時に盗賊や獣と戦うたくましい遊牧民たちが、先祖から受け継いだ言い伝えと戒めを守りながら、夜空の星が何かを告げるかのように輝いているのを見ていたことでした。

すると突然、あふれるばかりの輝きに満ちた天使が現れたので、羊飼いたちは震え上がり、恐怖に襲われます。

しかし天使は言います。

「恐れるな。

わたしは、民全体に与えられる

大きな喜びを告げる。

今日ダビデの町で、あなたがたのために

救い主がお生まれになった。

この方こそメシアである。(ルカ二:10)

なんと力強い、しかも喜びにあふれた言葉でしょうか。この羊飼いたちの属する民に「救い主」が到来すると告げられているのです。

思い起こせば、ずいぶん昔の話でした。彼らの先祖の、最初の族長であるアブラハムは、神に働きかけられ、選ばれて、この地に住むように遠いハランの地から導き出された人でした。その人々に、今、天使が告げます。

「今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった」と。

それはダビデの町でなければなりません。彼らは再び、あの栄光の、偉大なダビデ王が到来することを期待していたからです。ダビデという言葉聞いて、彼らは大いに喜んでしょう。自分たちが再び国土を回復し、繁栄する日が来ると。しかし続いて、天使は不可解なことを告げます。

「あなたがたは、布にくるまって飼葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけたであろう。これがあなたがたへのしるしである。」(二二)

今誕生する赤ん坊は、なぜか「飼葉桶」の中に寝かされていると言われます。馬小屋で誕生する赤ん坊とは、またなんと貧しい、身分の低い家庭に生まれる子供なのでしょう。

しかし、このことは「しるし」であると告げられます。すなわち、何かを指し示す、大いなる出来事の予告です。いずれ、この民を超えて全人類まで広げられることになる、神の秘められた大いなる「しるし」です。

それから長い年月を経て、私たちの世界においても、この天使が告げた知らせは、力強く、喜びにあふれた言葉として響き渡っています。「いずここの家にもめでたき音ぞれ」(讃美歌一〇一)とあるとおりです。人類の救い主として誕生した主イエス・キリストは、今年二〇一七回目の誕生日を迎えられます。

# 「静けさのうちに」



学長  
松本 宣郎

今年二〇一七年一〇月三十一日はルターが始めた宗教改革の、五〇〇年目の記念の日でした。東北学院大学の朝の礼拝ではそのことが触られました。また、これに先立つ二十九日の日曜日には、世界の多くの教会で記念の礼拝がもたれたことでしょう。

これと対象的なシーンをテレビなどで目にしました。一〇月三十一日です。「ハローウィン」です。東京、渋谷の光景でした。途方もない数の人たちが仮装する者眺める者様々に、ただ広い道路を歩いていました。元来は古代ケルトの悪霊祓いの祭が起源のようですが、アメリカなどで、子ども遊び的な行事から次第に大がかりな仮装行列のイベントになってきました。日本ではコマースやパブで仕掛けられ、流行のようになって、これほどの人気になっていきます。いずれにせよ、キリスト教本来の祭ではありません。

もつとも、キリスト教の暦の

中に、多数の信者が集まって、お祭りの盛り上がりを見せず機会がないわけはありません。イースター（復活祭）がその一つです。色つきのゆで卵が配られたり、パーティーが開かれたりします。カトリックの伝統の強い国では、これに先立つ受難節の前のカーニバルの華やかさがよく知られています。

日本では二月のバレンタインデーの方がキリスト教にまつわる賑やかな行事、というイメージがあるかも知れませんが、欧米キリスト教国では、本来はささやかなプレゼントの日、という程度ではないかと思えます。これも日本のチョコレート産業の仕掛けのせいではないでしょうか。

ではクリスマスはどうでしょうか。「クリスマス商戦」という言葉があり、プレゼントや食材セールはデパートや量販店の売り上げ戦略の重要な時節です。クリスマスがキリスト教のものであり、イエス・キリストの誕生であること、は知られてはいます。しかし商戦の主役はイエスではなくサントクロースなのです。

私は実は欧米のクリスマスに居合わせたことはほとんどないのですが、英国ロンドンで経験したクリスマスについて記します。

ロンドンでもクリスマス商戦

は盛大です。日本よりも早く、一月中旬には始まっています。サントクロースよりも、天使とか聖母子像が目立って飾られていましたが、セールはにぎやかでした。それぞれの家庭ではクリスマスが話題となり、プレゼントやパーティーが企画され、家のデコレーションも進められていたのでしょう。街全体がクリスマスモードで彩られた感じではありませんでした。

さてこうして一二月二五日を迎えました。私はそれまで八ヶ月ロンドンで暮らして、日曜は教会の礼拝に出席していましたから、ウィークデーでも二五日にはクリスマス礼拝がある、と知られていました。ところが親しくなっていた副牧師から、当日は地下鉄もバスも止まるから、ケンジントン・ハイストリートまで歩いて来い、車で他の教会員と一緒に教会まで運んでやる、と言われたのです。私のいたアパートからは歩いて三〇分くらいの所でした。正直ロンドンの情報が少なかつた私は、クリスマスだからそんなものか、くらいに考えて二五日を迎え、朝アパートを出ました。しばらく歩いていくうちに、いつもと全く違う感覚にとらわれました。街に音がしない。どの店も閉まり、バスも自動車も走っていない。無

人の通りを歩いていました。やがて約束の場所で副牧師の車に拾ってもらい、教会で静かにクリスマス礼拝を捧げたのでした。この日ロンドンではほとんど全ての店舗、公共施設は休み、地下鉄は空港と都心を結ぶピカデリーライン以外は休業、バス、タクシーも同じ、と聞きました。

これがロンドンの、キリスト教国のクリスマスに対する心構えなのだ、と思ひ至りました。人類の救いのために神が遣わしたひとり子の誕生の祝い方なのだ、もちろんロンドンには外国人も、キリスト教以外の信者もいます。二五日も午後には店が開いたりしていました。ホームパーティーも行われたでしょう。けれども私が歩いた、あの静寂な街は本当のクリスマス喜びを間違いなく現していたのです。

福音書が伝えるイエス誕生の物語もまた、救い主が人類に与えられた喜びを温かく記します。そこにはイエスの小ささ、ヨセフ、マリアの貧しさ、つましさが描かれます。これが真実であったのでしよう。神の子が小さな普通の赤子として生まれたからこそ、彼は全ての人間の救いのために生きるようになる、ということに他ならないのです。





# タイのクリスマス



大学宗教授任

藤原佐和子



東南アジアの「微笑みの国」タイは、人口の約95%が仏教徒なのですが、1%にはクリスマスチャンがいいます（日本と同じくらいです）。ではさっそく、私の初めてタイでのクリスマスの思い出をご紹介します。

私は北部チェンマイにあるキリスト教主義大学のチュリー先生という女性神学者のお世話になっていますが、彼女は準備のため、陸路で5〜6時間かかる農村の教会に先に行っていました。でもだいじょうぶ。チュリー先生のお友達がちゃ

んと連れていってくれますから。待ち合わせたバンに乗り込み、これで安心と思ったのも束の間、バンは町中を回って同行者を次々とピックアップ。日本だったら確実に捕まるレベルの定員オーバーになりました。皆さん地元の方言カムムアン（チェンマイ語）をがらん喋り、私と話すときだけタイ語を喋ってくれます。正直、ちょっと心細かったですよ。今でも忘れられないのは、ただでさえ過積載なのに、山道の対面通行（左は山、右はガケ）でのテンション高めの「追い越し運転」です。峠は見通しが悪いですから、いつ対向車（大型トラックとか）が飛び出してくるか分かりません。言わせてもらうと、マジで死ぬかと思いました。

クリスマスは「地域の人たちを招いてのイベント」なので、地元の子どもたちが出物を披露してくれたりました。そして日本とは違って、老若男女がサンタ帽を被ります。降誕劇（ページェント）もあるのですが、子羊役の子どもたちも羊なのにサンタ帽。タイとは言え、12月は乾期なので、ウルトラライトダウンだけでは厳しいほどの冷え込みで

した。礼拝が終わると、爆音カラオケ大会です。日本のカラオケは個室ですが、タイのカラオケは屋外（屋根だけある状態）なので、近所中大音量で聴かせてあげるのが常識です。午前2時まで続くのですが、驚くべきことに全員シラフなので、よ。歌声（音痴を含む）に耐えながら、毛布に包まって震えながら私は眠りました。

翌朝になると、今度はタイ歌謡を爆音で流すトラックが教会に入ってくるではありませんか。一体、何事かと思いませんか。チュリー先生に尋ねると、「お金がある人はお金を献げるけど、彼はお金がないから、代わりに音楽を献げてくれているわけ」。私はハッとさせられました。いつから私たちは、「献げもの」はお金じゃないといけないと思いついていたのでしょうか。心がこもっていたら、どんなことだって神様に喜ばれるはずですね。それでは、スクサン・ワン・クリスマート！（メリークリスマス！）

# “最高”のクリスマス、“最悪”のクリスマス

## ～思い出「十人十色」



今年は文学部総合人文学科一年生で、「聖書入門」を受講する約二十名の一年生に協力していただき、「いまどきの十代の学生目線」から見たクリスマスの思い出を紹介してもらいました。

### No.1 「キリスト教」の行事なの？

ある地方都市の教会の牧師さんが「教会さんでもクリスマスをやるとですか？」と言われて面食らったという話を聞いたことがあります。毎年十二月にお祝いするクリスマスが、実はキリスト教の祝祭であることを知らない人もいます。「そんなまさか、常識だよな」と思っていたら、学生の中にも**「実は知らなかった」という学生が二人**：約一割。クリスマスはサンタクロースの誕生日ではありませんね。イエス・キリストの聖誕を祝い、礼拝するのが、キリスト教のクリスマスです。

### No.2 最高ののクリスマス

多くの一年生にとつては十九年目のクリスマス。これまでの「最高の」思い出を聞いてみました。「幼稚園でサンタの衣装を着た先生たちと戯れたこと」、「中三の時に、友達皆で雪だるまを作ったこと」、「クリスマス賞の旅行が見事に当たったこと」、など皆それぞれに楽しい思い出があるようでした。ハッピー・メリー・クリスマス！

### No.3 最悪ののクリスマス

でも、思い出はいつも楽しいことばかりではありませんね。これまで経験した**「最悪」のクリスマス**を聞いてみました。いろいろ出てきました。「クリスマスだというのに、高校受験勉強のため塾で過ごしていた中三の冬」、「高三の時も、センター入試対策のためクリスマスも学校で授業だった」な

ど、受験と重なった苦い思い出が数々出てきました。受験を目前に控えた時期ですから、受験生の時はクリスマスどころではなかったかもしれません。他にも、「クリスマスに彼女にフラれた」や「クリスマスの日に猛吹雪で停電になり、復旧まで一週間近くかかり、極寒の年末を過ごした」、「ケーキじゃなくて餅がでてきた」など。

### No.4 クリスマスがあるある

最後に、皆さんに「クリスマスあるある」を聞いてみました。「クリスマスのためだけに恋人をつくりがち」、「周囲に恋人と一緒に過ごすと言ったのに、結局、家族と過ごしている」など、やはり恋愛ネタが出てきます。クリスマスは「恋人の日」ではないのにな。他にも「実は普通の日」や「どんなプレゼントをもらったのか聞かれ

る」など、クリスマスにありがちなお話が出てきます。

今年も学院大生として迎える最初のクリスマス。クリスマスの本当の意味を知りながら、思い出の新しい一頁に、学院大のクリスマス行事を書き加えて欲しいと思います。



(文：原田浩司、撮影：鐸木道剛)



# 「クリスマスと音楽」

—東北学院クリスマスとの出会い—

中川 郁太郎

私は昨年の10月から、東北学院大学宗教音楽研究所の教員として聖歌隊の指導をおこなうことになり、右も左もわからないまま、2か月後にはクリスマスに突入してしまいました。新入生よりも新鮮な気持ちで過ごした東北学院ではじめてのクリスマスのごとを、まず思い出してみたいと思います。

東北学院大学各キャンパスの学生がクリスマスを祝うのは12月の半ばですが、私の勤務する泉キャンパスではひと足はやく、12月のはじめに「泉キャンパスクリスマス」がやってきます。大学内だけではなく近隣の住民の方々や、子どもたちと共に過ごす、あたたかいクリスマスです。はじめに礼拝を守ったあと、いよいよ第2部がコンサートです！前半では、シンフォニック・ウインドアンサンブル(SWE)による吹奏楽の演奏にあわせてサンタクロースのプレゼントが配られ、後半はオルガン演奏あり、独唱あり、合唱ありと盛りだくさんのプログラムで、まさに音楽が時間を忘れさせる瞬間……でも、来てくれたお客様がバスで帰れなくなる困るので、実は演奏する私たちは時計とにらめっこ(まるでいつもの音楽礼拝みたいです)。まだ演奏会に行くことができない小さな子どもたちも、この日の泉キャンパス礼拝堂

では、クリスマスをお祝いする音楽と一緒に過ごします。

今でこそ、クリスマスになれば街中は(聞きたくなくても)音楽で溢れますが、ほんの300年前まで、クリスマスにすべての人が聴けたのは「教会のクリスマス礼拝の音楽」ぐらいのものでした。バツハもモーツアルトも「あの時、教会で聴いた音楽の作曲者」として知られていた筈です。教会の音楽は、どんなに有名な作曲家の作品でも、すべての人に語りかけたのです。

12月半ばになると、いよいよ東北学院大学のクリスマスがやってきます！「泉クリスマス」から「大学クリスマス」までの半月のことはよく覚えていません、無我夢中でしたので……。聖歌隊、グリーククラブ、キャロラーズに、卒業生や一般参加の学生も加わった大(?)合唱隊が、キャラバンのように3キャンパスを巡ってヘンデル作曲《メサイア》の合唱曲を歌い歩きます！大切な勉強の時間の無駄つかい!いやいや、無駄があるからこそ人生は美しい!歌の無い世界なんて生きていく価値がありますか?みなさん。

ヘンデルと言えば《メサイア》、《メサイア》といえば「ハレルヤコーラス」、東北学院クリスマスのクライマックスも「ハレルヤコーラス」です!でも……

じつはこの「ハレルヤコーラス」、歌詞は黙示録から採られていて、最後の審判におけるキリスト(者)の勝利を描いており、クリスマスとはなんの関係もありません。それをクリスマス礼拝で歌うのはちょっとヘンデル?……いえいえ、19世紀アメリカで、クリスマスマスのチャリティーコンサートに歌われて以来、貧しい人々の冬を絶えずあたたくかくしてきた、大切な「ハレルヤコーラス」なのです!

私をはじめ体験した東北学院のクリスマスは、すべての人に開かれた「教会のクリスマス」の伝統を受け継ぐ、あたたかくかけがえのない時間でした。今年もまたクリスマスがやって来ます!朝が苦手ないつもは礼拝に間に合ったことがない人も、カードリーダーにつき合って2、3回出てみたただけ、という人も、今年は礼拝堂で音楽と共にクリスマスのひと時を過ごしませんか?もちろん、合唱に加わって一緒に歌って下さるのも大歓迎です!「歌う阿呆に見る阿呆、同じ阿呆なら……」と歌うではありませんか!(ちよつとちがったかな?)。





# 「僕(しもべ)は 友達が少ない」

デモテへの手紙第二4：16～18



株式会社キリスト新聞社  
代表取締役社長  
まつたに しんじ  
松谷 信司

校や教会でも素直に公言できず肩身の狭い思いをしていた。紆余曲折(2度のジョブチェンジ)を経て、「キリスト新聞社」という業界紙の仕事をする身になったが、長い間「友達」と違うこと、少数派になることを過剰に恐れていたと思う。

現代においても若年層にとって「友達」関係は重大な関心事である。SNSが普及した今、「いいね」の数、フォロワーの数に一喜一憂し、LINEの既読・返信に神経をすり減らすという息苦しい「友達」付き合いに振り回されてはいないだろうか。キャンパス内で「ぼっち」だと見られるのを恐れてトイレ内で弁当を食べるといった「便所飯」が社会問題になり、さらにはクリスマスに一人でいることを形容する「グリぼっち」などという用語まで登場した。主の降誕を祝うのが本来のクリスマス(そもそも生誕祭は推しキャラのフィギュアとパースデーケーキさえあればお祝いできるはず)だが、一人で過ごすことが、さも寂しいかのような風潮には違和感しかない。

両親が熱心なクリスチャン(ガチクリ)という「クリスチャンホーム」に生まれたため、テレビ視聴は週30分、就寝は夜8時など、厳格な特殊ルールがいくつもあった。ファミコンも買ってもらえず、友人の家に入り浸るといった不遇な幼少期を過ごす。さらに、福島の片田舎だったこともあり、家がキリスト教であること、日曜日に教会へ行くことなどはとうてい公にできない秘密だった。初めて自らクリスチャンであることを積極的にカミングアウトできるようにになったのは、大学に入ってからのことだった。

また、中二病をこじらせ、高校3年まで本気で「漫画家になりたい」という夢を引きずったものの、まだオタクが市民権を得ていない時代でもあり、学

校や教会でも素直に公言できず肩身の狭い思いをしていた。紆余曲折(2度のジョブチェンジ)を経て、「キリスト新聞社」という業界紙の仕事をする身になったが、長い間「友達」と違うこと、少数派になることを過剰に恐れていたと思う。

伝道者パウロも、「だれも助けにくれず、皆わたしを見捨てました」と綴っている。この書簡は、パウロによる数々の手紙の中で最後の手紙とされているが、晩年に処刑されるまで、孤独との闘いは続いた。しかし、ここでパウロは「主はわたしのそばにいて、力づけてくださいました」とも告白している。決して希望を捨てない信仰者の姿がここにある。

私たち現代人は、復活のイエスを「見るまで信じない」と拒み続けたトマスのように、「目に見える」現象のみを信奉し、右往左往する弱さを抱えている。しかし、同時に「風水」「占い」「血液型」など「見えないもの」に縛られて生きていくことには無自覚である。私たちクリスト者は、たとえ「友達が少ない」ように見える孤独な状況にあっても「インマヌエル」＝「神共にいまし」との宣言を信じて歩む。それは「ポケモンGO」でスマホを介して、あたかもそこにポケモンがいるかのような世界に浸るように、聖書というアプリを介して、この世に臨在する主なる神を実感できる信仰の故である。「インマヌエル」は、いわば「ぼっちなんかじゃない」という聖書の中心的な福音のメッセージなのだ。

## ◆まつたに しんじ 松谷 信司氏

- 一九七六(昭和51)年生まれ。  
(福島県出身) 40歳
- 一九九五(平成7)年3月  
福島県立福島高等学校卒業
- 4月 埼玉大学教育学部  
小学校教員養成課程入学
- 一九九九(平成11)年3月  
埼玉大学教育学部小学校  
教員養成課程卒業
- 一九九九(平成11)年4月  
株式会社フレックス入社
- 二〇〇一(平成13)年3月  
株式会社フレックス退社
- 4月 立教小学校入社
- 二〇〇六(平成18)年3月  
立教小学校退社
- 4月 株式会社キリスト新聞社入社
- 二〇一七(平成29)年5月  
株式会社キリスト新聞社  
代表取締役社長就任

### 主な著書

- 『キリスト教のリアル』  
(ポプラ社)
- 『若者とキリスト教』  
(共著、キリスト新聞社)

## 「愛こそすべて」

ローマの信徒への手紙8：35-39

日本基督教団石巻山城町教会  
牧師せきかわ ゆういちろう  
関川 祐一郎

救いを宣べ伝えました。パウロは他の箇所でも次のようにも語ります。

「わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるでしょうか」(ローマ7：24)。

2011年3月11日の東日本大震災から6年7カ月が経過しました。目に見える形での復興は確かに進んできました。しかし、心の復興にはなお時間を要します。「なぜ、震災が起こったのか」、「なぜ、自分は生き残り、あの人は命を落とさねばならなかったのか」このような問いが立ちはだかります。

このようになわたしたちの現実の中で、聖書は何を語るのでしょうか。パウロはこう語っています。

「だが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができません。難か。飢えか。裸か。危険か。剣か」(ローマ8：35)。

伝道者パウロ自身、その歩みは苦難の連続でありました。時に命の危険にさらされながら、イエス・キリストの

れた仕方です。殺されてしまったからです。弟子たちを襲ったのは失望と落胆、そして絶望でありました。もはや神は自分たちをお見捨てになつたのだ。闇がすべてを覆いつくしたかのように思えました。

しかし、三日目の朝、主イエスを収めたはずの墓は空でした。主イエスは確かに甦られたのです。神は弟子たちをお見捨てになつたではありませんでした。むしろ、イエス・キリストにおいてより深く愛して下さったのです。神の愛、キリストの愛から引き離されるどころか、むしろより強くその愛に結び付けて下さったのです。

この、キリストの愛がわたしたちを捕えます。孤独に思うとき、もはや誰からも見捨てられたと思ってしまうときがあるかもしれません。しかし、その時にこそイエス・キリストが私たちの傍らにおられることを覚えておきたいと思います。キリストの愛、それこそ私たちが生かすすべてなのです。



## ◆ 関川 祐一郎氏

一九八四(昭和59)年生まれ。

(東京都出身) 33歳

二〇〇七(平成19)年3月

成蹊大学文学部現代社会学

科卒業

二〇〇七(平成19)年4月

東京神学大学神学部3年次

編入

二〇一一(平成23)年3月

東京神学大学大学院修士課

程修了

4月 日本基督教団石巻山

城町教会主任担当教師

4月 東北学院中学校・高

等学校非常勤講師

〔現在に至る〕

二〇一六(平成28)年12月

宮城学院評議員

二〇一七(平成29)年6月

社会福祉法人桶谷みぎわ会

監事



# クリスマスのご挨拶

みなさん、クリスマスおめでとうございます！

総合人文学科長 出村みや子



ルカによる福音書一章四六〜五五節に収録された「マリアの讃歌」は、天使によって突然に救い主を身ごもるといふ告知に直面して、戸惑いつつもそれを神様の計画として喜びをもって

受け入れようとするマリアの歌で、待降節（アドヴェント）の期間に読まれるにふさわしい聖書箇所です。今年は宗教改革五〇〇周年を迎え、改めてルターの歴史の意義について振り返る機会となりましたが、ルターの著作の中に「マリアの讃歌」について記した美しい小品があります。「マリアの讃歌」の歌詞を見ると、悩める者、貧困や飢えに苦し

む者、社会のなかで弱者の立場に押しやられている者、そうした小さき者すべてに力強い慰めと希望を与える歌であり、ルターはマリアの歌に宗教改革における彼の思いを重ねて読んでいくことがわかります。クリスマスを迎えるに当たって学生の皆さんにはぜひ、宗教改革の時代に「マリアの讃歌」が果たした役割に思いを馳せて頂ければと思います。

大学宗教主任 阿久戸 義愛



クリスマスおめでとうございます。今年もクリスマス礼拝がそれぞれのキャンパスで盛大に行われ、皆さんとともにクリスマスをお祝いすることを感謝します。

クリスマスは御子キリストをお迎えする季節です。クリスマスの時期は、とても寒くて暗い季節です。そんな時期に、イエス様は宮殿ではなく、小さな馬小屋にお生まれになりました。キリストの誕生の準備をするこの季節、私たちもまた、自分たちそれぞれの心の中に、宮殿のような立派なものではなくて馬小屋のような質素なものかもしれませんが、イエス様

をお迎えする場所をしっかりと準備したいと思います。そして、いつでもインマヌエル（「神われらと共に」と呼ばれる方、イエス・キリストが私たちと共にいてくださり、私たちが救ってくださることを覚えて、感謝しつつ、クリスマスとともに祝いたいと思います。キリストの到来、クリスマスをお喜び祝う笑顔が、皆さん全員に届きますように。

大学宗教主任 藤原 佐和子



大学宗教主任 藤原 佐和子  
ジョセフ・スレイト（文）、フェリシア・ボンド（絵）  
による有名な絵本に『クリスマスのはし』があります。今は翻訳が変わって『やまあらしぼうやのクリスマス』になっていますが、

私は子どもの頃に読んでいた旧翻訳の方が好きです。やまあらしの子どもがお母さんと暮らしています。学校ではページェント（キリストの降誕劇）の準備が進んでいるのですが、雑用ばかり押し付けられて仲間に入れてもらえません。いざ本番になると、観客たちはざわざわ。ステージの上のクリスマスツリーのてっぺんに「星」がないのです。「星」

がなければ、赤ちゃんイエスを探しに行けません。やまあらしの子どもはてっぺんに登って丸くなります。星だ！星だ！と言って、みんな喜びます。お母さんは微笑んで、「私の心の星」と言うのです。クリスマスにはぜひ、皆さんのことを「私の心の星」と思っている人たちにカードを書いたり、電話したり、会いに行ったりできるといいですね。

## 編集後記

「宗教改革五〇〇周年」で賑わった秋も終わり、クリスマスの季節を迎えました。大学礼拝ではこの季節でなければなかなか選びづらい讃美歌があります。94番から119番の、いわゆる「クリスマス・キャロル」ですが、いよいよ解禁です！皆さん、声を合わせて歌い、好きな讃美歌を増やしてください。今年も終わりが近づいてきましたが、終わりは新たな始まりの時です。新鮮な心で新しい年を迎えましょう。

二〇一七年二月五日

東北学院大学宗教部

編集者 鐸木道剛・原田浩司

〒九八〇―八五一―

仙台市青葉区王樋一丁目一番一

## ★第29回泉キャンパスクリスマス

12月1日（金）18:30～ 泉キャンパス礼拝堂

### 第一部 礼拝

説教者：日本基督教団仙台南伝道所  
平賀真理子牧師

### 第二部 クリスマスコンサート

クリスマス・メドレー演奏、学生有志合唱団、  
みんなで歌おう、キャンドルサービス 他

## ★大学クリスマス

泉キャンパス：12月14日（木）10時25分～  
土樋キャンパス：12月14日（木）16時20分～  
多賀城キャンパス：12月15日（金）10時25分～  
説教者：東京神学大学准教授 長山 道先生  
ヘンデル・メサイヤ合唱

◆クリスマス礼拝のご案内◆